

37 曲直瀬道三と佐野

—「足利の三帰」の検討—

中村 輝子・遠藤 次郎

曲直瀬道三は十八年間の関東の留学を終えて京都に帰る折（一五四五年）、別れの挨拶のために佐野の東根庵に立ち寄ったとされている。これまで、東根庵がどこにあり、誰が住んでいたのか、不明であった。最近になって、佐野市の郷土史研究者、京谷博次氏、桑田喜八郎氏の協力を得て、東根庵について明らかにすることができた。また、これに伴い、道三と佐野とのいくつかわかかわり合いを明らかにすることができ、従来、問題視されてきた「足利の三帰」の像にせまることができた。

佐野の古地図（蓼沼家蔵古絵図）に「東根庵」が描かれており、現在の安蘇郡田沼町栃本附近、唐沢山の西部に当たる。当時、佐野の唐沢山城主は、佐野泰綱（二四八二—一五六〇）、豊綱（一五一九—一五五九）、昌綱（二五三〇

—一五七四）である。現在、栃本の本光寺には歴代の佐野氏の墓碑が残されており、泰綱、昌綱のそれを確認することができ、泰綱の法名が「東根院一溪唯禅庵主」であることから、東根庵は泰綱の庵と推定され、道三が帰洛の折、そこを訪れたのは泰綱に挨拶するためであったと見られる。

道三と泰綱との関連を検討する過程で、泰綱の子、豊綱と道三とが密接な関係にあったことも判明した。京都大学富士川文庫に『従佐野豊綱三十ヶ条不審、盍静老人答話』と題する手紙の写しが残されている。この他、奈須恒徳が筆写した同じ内容のものが国会図書館に所蔵されている（『家学叢書』）。富士川文庫目録、奈須恒徳、ともに、「佐野豊綱」と誤読したために、人物を特定することができず、これらの資料は注目されてこなかったと見られる。本資料は、豊綱の三十ヶ条の医学上の質問に対して道三がこれに答える、という内容である。医学に関する質問が二例ある他は、大半が「察証弁治」に関するものであり、『啓迪集』にも通じる高度な内容となっている。本資料の中には道三の初期の医書にしばしばみられ

る「当流は丹溪流なり」という主張が濃厚にみられることから、本資料は道三の初期のものとして推測された。また、本資料には年号が記されていないが、他の資料を照合することにより、永禄元年（一五五八）に書かれたものであることが明らかになった。この年は豊綱が四〇才で戦死する一年前に当たる。道三が帰洛する年に豊綱は二十六才であり、道三から高度な医学を学んでいたとの推測に無理はない。

佐野と道三との関係を考える上で、さらに興味深い記事が尊経閣文庫の『道三医書』の後書きに存在する（本資料の存在については小曾戸洋先生に御教示いただいた）。ここでは、道三が田代三喜と佐野の赤見で対面し、師弟の約束をしたことが記されている。赤見は足利と吉水（昔の佐野の館の所在地）を結ぶ位置にあることから、足利在住の道三と佐野氏との交流に、三喜も何らかの形で関与していたと見られる。

連歌師の柴屋軒宗長（一四四八—一五三二）の旅行記『東路の津登』の中に、永正六年（一五〇九）に宗長が佐野泰綱亭などに滞在したとの記述がある。また、宗長は、著

名な連歌師、猪苗代兼載が下総国古河の地で関東の名医、江春庵（三喜）に治療を受けていることを聞き、兼載と手紙を交わしたことを記している。このような記録から、佐野氏と三喜との関係もうかがうことができる。

『三喜十卷書』などの医書では、著者名を「足利の住僧三帰廻翁」と記している。しかしながら、国史学の分野の研究では古河公方の医師としての田代三喜が足利に住したという事実は浮かび上がってこない。古河の三喜と足利の三帰を別人とする説もあるが、演者らは、足利の道三と古河の三喜とが佐野の地で交流があったこと、出会いの地「佐野の赤見」は当時の足利庄に属することなどから、道三が関与した医書では、これに因んで「足利の三帰」と記したと推測している。

（東京理科大学薬学部 薬用植物・漢方研究室）